

にいがた 食の歳時記 ～日本酒～



今年もこの季節がやってきた。そう、新潟の500種以上の酒を楽しめる「にいがた酒の陣」だ。今年は3月9日10日の2日間。何と、1月末には東京駅でイベントも開催されたようだ。新潟で「酒」と言えば「日本酒」。蔵元の数では全国1位だ。蔵元の数が多いということは、それだけいろんなお酒があるということ。いろんなお酒があれば、好みのものを見つけるのに飲み比べたくなる。ってことで、「酒の陣」なのか…？ 少なくとも、新潟駅と越後湯沢駅には「ぼんしゅ館」なんて飲み比べできるところもある。そういえば、大好き「ふるさと村」にも飲み比べできるところがあったような…。いつでもどこでも「酒の陣」ですね。

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニユース

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

2-3
Vol.102

温古知新 54 「菜根譚」26

年も改まりしばらく経ち一回目の「温古知新」です。本年も、どうぞよろしくお願ひします。

君子にして、而も善を詐は、小人の悪を肆にするに異なること無し。君子にして、而も節を改むるは、小人の自ら新たにするに及ばず。

(上に立つ者なのに偽善を行っているのは、度量や品性にかける小者が悪事をやりたい放題しているのと変わらない。上に立つ者なのに自戒の決め事を変えるのは、度量や品性にかける小者が心を入れ替えるのにも及ばない。)

心から善い行いをし、一度決めたことを頻繁に変えないことが、上に立つ者の条件なのかもしれませんね。

家人に過ちあらば、宜しく暴怒すべからず、宜しく軽棄すべからず。此の事、言い難くば、他の事を借りて隠に之を諷め、今日悟らざれば、来日を俟ちて再び之を警めよ。春風の凍れるを解くが如く、和気の水を消すが如く、纒は是れ家庭の型範なり。

(家族に過ちがあったとき、ことさら激しく怒っても軽視してもいけない。言い難い

ことなら、他の事に言い換えたりして注意すべきで、それに気が付かなければ、後日、機会を改めて、再び諫めることだ。この方法は、春風やのどかな空気が氷を溶かすようなもので、家庭円満の基本形である。) 近しい間柄である家族だからこそその接し方があるということ。それも弁えてこそなのですね。

此の心、常に看得て円満ならば、天下自から欠陥の世界無からん。此の心、常に放ち得て寛平ならば、天下自から険側の人情無からん。

(常に、自分の心を監視して円満に保つようにしていけば、自然と、世界には欠陥など無くなる。また、常に自分の心を大らかに開放的にして公平にしていけば、自然と、世界には刺々しい心が無くなる。)

みんなが自制心を持って、おおらかで公平にできれば、平和な世の中が訪れる。難しいことですが、心がけていきたいものですね。

今年も皆様にとって、穏やかな良い年でありますように。「温古知新」で、少しでもその手助けができましたら幸いです。

(古川久美子)

パティオ俳句会 「リリック鍛錬会」

主宰 環順子様

(東京都・豊島区)

1月10日(木)、場所は池袋にある東
京芸術劇場。ここで10時から17時の長
丁場で俳句とエッセイの会があると
聞きし、どのように開催されているの
だろうとお邪魔しました。

この「パティオ俳句会」は、環順子
氏が故小澤克己氏の「遠嶺」、その流
れを汲む「爽樹」を経て、昨年平成30
年4月に創立した新しい会。その勉強
会の一つが「リリック鍛錬会」であり、
俳句とエッセイの融合により新しいホ
エジーを描くことを目標としている。

さて、7時間にわたり、どんな展開
がなされるのか！

まずは、新年句会ということでご挨拶・諸連絡に続き、会員から、当日の
席題3句と雑2句が発表される。

席題「日脚伸ぶ」「冴返る」「梅」、雑
「筆」「肥」



▲統率力、企画力、何をしてても一級の女丈夫 環順子主宰

すかさず主宰は携帯でどちらかに電
話をされる。聞けば、伊東にお住まい
の会員に席題等を告げ、その方も即句
を作り、翌日には投函されるのだとか。

12時が句会スタートなので、それま
での約1時間半の間に、この季語と一
文字を入れた5句を作り、昼食も済ま
せておく。30分も経たないうちに主宰
が席を立ち、投句を済ませ「木戸さん、

ランチに行きましょう」と声をかけて
くれる。「えっ、もう終わったの!?!」
と思いつつ、一緒に階下に行く道すが
らお聞きすると、昨日も席題10句の句
会に参加したばかりとのこと。二度
びつくり！皆さんと一緒に部屋でお
弁当を食べながら、北は北海道、南は
島根まで、それぞれの出身地のお正月
やお雑煮、方言の話題で盛り上がる。

さあ句会開始。5句×8名＝40句か
ら各人5句、特選1句を選ぶ。◎は主
宰特選

梅が香や客越後より来たり 環
会員：お客さまも梅も初句会にふさわ
しい／客が梅の香をつれて越後より
やってきた／ほのと香って挨拶句とし
てとてもいい。こんな句がすぐにでき
たらいいわ／それも一番で主宰の句、
できすぎ(笑)。

主宰：俳句は挨拶ですからね。でも
「梅」の席題がなかったらできなかつ
た。お客さまより客と言った方が格
調高い。

傷深き木彫の盆や冴返る 佐山
会員：「冴返る」の季語が効いている
／物に心を寄せている感じがいい。



▲季刊俳句誌「パティオ」通巻
第2号 スペイン語で「中庭」



▲黒1点 司会進行の神原さん。
男女の別なく自然とそこにい
らっしゃる。

節分の鬼より肥ゆる天邪鬼 すずき
主宰：片意地を張っている人のことを
言っているのか、踏んづけられている
天邪鬼のことなのか、踏んづけられて
「やっぱり節分くらいしようか」とい
う天邪鬼な人として解釈した。

作者：自分のこととして言いたかつ
た。「鬼より肥ゆる」で客観的な視点
になってしまった。

小刀の銘は「肥後守」魚は氷に 環
会員：「は」は入れなくていいのでは？
「肥後守」まで一気に詠んだ途端に魚
は氷に、緊張感が見事にほぐれてうま
いな、と／ちよつとはぐらかした感じ
のおどけた季語。これが「冴返る」で
はおもしろくない。

主宰：銘「は」と入れないと三段切れ
のようになる。

あてどなく風の重さを踏む梅見 神原
会員：踏みしめながらという意味？
「風の重さを踏む」に惹かれた／「風
の重さを踏む」がわからなかった。

作者：踏んでもらわないと困る。春先
はだんだん風が軽くなるが、梅見をし
たときはまだ風が冷たく重かった、と
いうことを言いたかった。

心経を唱へ鎌倉梅探る 奥田
主宰：鎌倉はたくさんお寺がある。そ
れらを辿りながらの探梅行、いいです
ね。

筆順の一、二、三四日脚伸ぶ 桜井
会員：厳寒のなかではそんな悠長に
一、二、三四なんて言っていられない
／日脚が伸びてくる季節、どういう字
を書いたのかなーと思いを馳せた／
一、二、三四と日脚伸ぶがいい。

枝折戸の細き灯や梅屋敷 花島
会員：奥ゆかしい日本庭園の風情、き
れいな句。

日脚伸ぶ渚は光るラブソディ 神原
会員：聞いたことのあるフレーズだが
(笑)、字を見ただけできれいな光景が
広がる／日脚が伸びて風が光る、明る
い景色。えーっ神原さん!ラブソディ
なんて句は作らないと思った／私は採
らなかつた、字でわかつたもの(笑)。

◎一葉乃自筆原稿松雪草 片岡
会員：よく松雪草をもってきたね。苦
労のすえ若くして亡くなった一葉と松
雪草の取り合わせで採った。

2



主宰：一葉のひっそりとしたさみしさと松雪草がとても合っている。これがスノードロップだと興ざめ。

作者：12月に一葉の直筆原稿が見つかったという記事を読んだ。ちょうど今日「筆」が出たからしめしめと(笑)。全部漢字にしたかったので乃を使った。

夕まぐれ遠富士と月冴返り 奥田
主宰：「遠富士と月冴返る夕まぐれ」でもいいかも。好きですが、
作者：こちらに変えます(笑)。

小肥りの裏返されし初爨^{やいば} 桜井
主宰：私みたい、この前、初爨に行つて裏返されてきました。

会員：あれ、主宰の句かと思った。桜井さん、主宰のことを詠んだのね(笑)。

冴返る鏡に謀る紅の濃さ 花鳥

会員：この謀るだからいい。紅の濃さが効いている。

主宰：冴返るは、せっかく春になったと思つたらまた寒くなってきた、という意味でプラスの季語ではない。今日だけ紅を濃くしなければならぬ、謀りごとがあるのね、この人は。神原さんじゃないわね(笑)?

作者：花鳥です。

主宰：今日は薄紅だから謀りごとはなしね、よかった。

鉄棒の端の錆びたり日脚伸ぶ 片岡
主宰：鉄棒の錆びの句はよくある。逆上がりして夕焼けを見たとかね。でもいい句。



◎秒針の音軽やかに日脚伸ぶ 佐山
会員：類句はあるかもしれないが、日脚が伸びるとともに秒針の音も軽やかに。雰囲気伝わってくる／雪国の陸上部だったので、即ストップウォッチをイメージした。春が近づくとグラウンドで走れる！という待春の気持ち。

主宰：季語は不思議。これが「日脚伸ぶ」ではなく「日短か」だとダメ。「日短か」が兼題であれば、また違ってくる。春の訪れを喜ぶ気持ちが軽やかに詠まれている。

パステルの色鉛筆や春隣 すぎき

主宰：パステルカラーで春、そして色鉛筆、類想はあるが春らしくいい。

◎探梅や矢立の筆の有りどころ 花鳥

主宰：しつかりとした句で、探梅や、で切ったこともいい。芭蕉を想起させる。私だけの特選だったが、矢の字が天に見えて採らなかつた人もいたよう。天立ではなく矢立だと思えばどう

ですか？

会員：とてもいい句(笑)。

主宰：梅探る、ではなく、ここはやはり「探梅や」。出歩く季節になって、矢立の筆はどこにあつたかなと、その存在感を感じさせる。

会員：王道俳句だねえ(笑)。

5分の休憩をはさんで、先月の5句とその1句にまつわるエッセイを各人が朗読し、その後、皆さんで気になるところを指摘し合う。以前は作家の指導を仰いでいたが「もう口をはさむ余地がなくなった、皆さんでおやりなさい」とお墨付きをいただき、合評形式で進めている。

昨年亡くなった母との思い出を書いた方は、読みながら想いがあふれ涙声に。他からも鼻をすする音が重なる。義母のレシビの話を書いた方からは、晩年ばけた義母が「息子の嫁になつてくれ」つて言うから「いやです」と言つたのよ、と、エッセイにはないエピソードも飛び出す。涙あり、笑いありのあつという間の7時間。そして半年に1回、これら6回分のエッセイをまとめた冊子を作り、宝物を増やしてしく。汗をかいた分、得るもののが大きい会だ。

★席題5句ですら大変なのに、さらに2週間以内にエッセイをまとめるという課題が課せられ、次の回でその作品が組上に載せられ、ああでもないこうでもない採まれ、自分なりに修正を加え再度提出、と常に休みはない。自虐的な営みに、思わず「これSM句会

ですね」と口走ってしまったほど。「文は人なり」と言うが、一句に端を発し、その人だけの経験と言葉と想いが掛け合わされた物語は、唯一無二のその人そのもの。うまくならない、そして自分も人もよくしたいという他者への関わりが尊い。会を終えたときの、全力で走り抜けたような皆さんのすがすがしい表情。人間っていいな、すごいな、という気持ちが自然と湧いてきた。(木戸敦子)



▲喜怒哀楽の色濃い充実の7時間

季刊俳句誌「パティオ」の見本誌のお申込みは「パティオ」発行所 環 順子 (1冊1,000円)
住所 〒179-0071 東京都練馬区旭町2-31-14
電話 / 03-3939-1921

浜田享子様

『句集 乳歯』 (東京都・杉並区)

昨年9月、第一句集『乳歯』を発行した浜田享子さん。このインタビュアあとは、スクエアダンスの練習があるとのこと、効率よく同じ建物内でお話をお聞きしました。

Q 趣味が多いとか

それほどでもないわ。俳句以外では、俳画、コーラス、読み聞かせ、ダンスはスクエア、社交、カントリ、それくらい(笑)。そういった芸能活動は14年前からで、俳句だけが30年ほど。今回の句集はその俳歴30年の節目に夫から「やるなら元気なうちがいい」と勧められ、思い切ってまとめました。

Q 仲良くご夫婦で来社くださいました

句集を出すなら御社がいいと知人に紹介され、どんなどころで本が作られているのかとにかく見たい!と、即新潟行きを決定。夏の盛りの頃、夫と



▲お納めした句集が届き縁側で開ける浜田さん

弥彦温泉に泊まり、弥彦神社に成功祈願。翌日御社にうかがい、そこで二校を済ませ、表紙のデザインをする現場に立ち会った。あれこれ思案していたところは、書名の文字を銀色の箔押しにしては?という提案があり、初めて句集『乳歯』の上梓が現実味を帯びた。9名のミュージズにも会えたとし、新潟に行つて本当によかった。

Q 反応はありましたか

句集を出したことがこんなに様々なものを運んでくるとは思いもよらなかった。お送りした方や他結社からたくさん温かい感想が寄せられ感動でした。新たな俳縁がとても嬉しい。

Q 俳句との出会いは

幼なじみの同級生が保険セールスをしていて私に、ある会社の重役を紹介してくれた。彼は仕事ではなく肩書のない名刺をくれ「歳時記を持つてここにいらつしやい」と。仕方なく歳時記を買つて出かけた所が、その会社の職場会所。その時の重役さんが生涯の趣味となる俳句の先生、土生重次であった。これといった趣味が何もなく何となく続いた気がする。

Q 何もなかった?

そこだけが自分を取り戻せる時間、心の支えだった。それ以外はすべて人のための時間。長男が幼稚園の頃から大変な病気になる、よく発作を起こしては救急車を呼んだ。小学校の時には自ら1年間転地療養をしたい、と離れて暮らすことに。四六時中頭から離れ



▲各季節の扉にはセンスのいい俳画が

ない息子。寂しさを感じなくていい時間を持ちたくて、34歳のときに保険外交員の仕事を始めた。子どももがんばっている、自分もがんばろうと、一番つらそうな仕事を選んだ。全く手をかけられなかった妹は、兄の姿を見ていたからか、東京都で初の女性救急隊員になった。

Q 大変なお仕事だったのでは?

数字が人格の世界、でも結果さえ出せば逆に自由がきくので、4時過ぎには家に帰る算段をしていた。名刺1枚で知らない人と会い、その方の生き方を学べる。28年間、本当にいい勉強をさせてもらった。楽しかったが、やめたいと思つたことは何度も。でも、やめたらそれまでの努力が無になる。働いて数字を出せばそれなりのお給料がもらえ、こんな確かなものはない。そのため我慢と工夫を重ねた。老婆は一日にしてならずよ(笑)。何を置いても一番大変だったのは息子の闘病、それに比べたらー。

Q そんなに大変だったのですか

息子が20代のころピースポット(世界一周の船旅を通して国際交流を図っているNGO)に参加したいと、突如

言ってきた。何か自身で思うことがあったのかも。でも、南米のチリで発作を起こし、火傷を負った。息子を連れ帰るため、一人で2日かけて聞いたこともない南米チリのバルパライソへ。何とか帰りの飛行機に乗ったものの、乗り換えのリマの空港でまた発作が。乗せられない、いや手術がある、乗せてくれ、降りろの応酬。もう怖いものはなくなった。その後、54歳でがんになり、6か月の入院生活。その間に義母の介護も5年にわたつた。60歳で息子を失い、何もかもやる気がなくなり、しばらくして退職。何年か経つて、ようやく自分のやりたいことをしようと思えるようになり、それで今の芸能活動へ(笑)。

Q これからは?

当時は思わなかったが、今になると俳句を続けてきて本当によかった。ダンスも旅行もいろいろしたいことはあるが、あとは残された時間の問題。そういう意味で、毎日が貴重で日々が有難い。今日一日過ごせることを感謝とともに送りたい、そんな気持ちが強くなっている。

★息子の病気がなければ、出会えなかったであろう人たちに感謝をする浜田さん。大変な生保業界の仕事も、息抜きでもあったというそのパワーは、もつとつらい人がいる、それを思えば何でもできるし、感謝しないと罰があるという思いがあったから。生きた言葉、経験で得た言葉はシンプルで強く心に届いた。(木戸敦子)

投稿作品



※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、246でした。
※しめきり 2019年3月15日(金)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

短歌

- 1 金堂の柱消炭に残りたる異臭あふるる暑中の倉に
石尾曠師朗(東京都)
- 2 痛いのは心の世界本音ではユーモア求め笑を愛したり
五味田幸夫(東京都)
- 3 長年の「根室文学史の遺産」結び迫りてふるさとを知る
早坂絃司(北海道)
- 4 三溪園紅葉一枚散りて来ぬその赤き色おもはずひろふ
中沢敬子(千葉県)
- 5 かわいいと手塩にかけし育てては老々介護看取りし犬よ
大橋絵代(千葉県)
- 6 皇后の双壁たるは光明と美智子さまなり天平と平成
阿部 至(埼玉県)
- 7 ファックスもテレビも早く置きたる吾代変りして折りスマホの世
高須 孝(愛知県)
- 8 白髪の草笛光るに憧れるへアバージョン夢の広がりぬ
濱崎祥子(鹿児島県)
- 9 お早ようと朝一番に母の顔七〇才迎え思い出忍ぶ
大鳥居牧子(東京都)
- 10 われにのみ永きわが生それゆえにイヤな小男にもゆたかな永さか
安部 哲(新潟県)
- 11 清し眉引き上げながら青年は明日は入社初日と告げる
寒川靖子(香川県)
- 12 八十を過ぎて後悔何なる健やかにりと何時も言いたし
田中豊恵(新潟県)
- 13 大売出しの赤旗風にはためけど商店街に人影まばら
桑原謙一(群馬県)
- 14 三万日存ふわれの小さき幸朝々に座す便座の温み
黒澤正行(福島県)
- 15 フォッサマグナなにそれ地層の本を練る厚真町の震度七なり
合田浩子(茨城県)
- 16 目詰りの消雪パイプの整備終へ花開くごと水の吹き出す
夏井寛治(新潟県)
- 17 元朝の晴れて無風を瑞兆と詠みし啄木四月に逝きぬ
久本にい地(岡山県)
- 18 秋盛り鬼怒川の地に癒やされて空山川が輝いて見ゆ
峯岸信子(東京都)
- 19 積もりつ、まわりの気色変えてゆく雪降る街に外灯のつく
高橋登志子(新潟県)
- 20 流れ星願ひよ叶へ真夜独り天空銀河ふたご座の光跡
内藤明子(東京都)
- 21 決勝戦エラーが続き叩かれた試合に勝ったみんな泣いた
坂元正憲(東京都)
- 22 未来とは死後を指すらしいささかの夢もあらんか生果つるとも
高橋卓二(新潟県)
- 23 猪鍋の煮立ついろりを囲みおし疎開の吾らも共に味わう
関原幸子(東京都)
- 24 復興のつち音鶴首待ちわびる明かりなき窓続く被災地
守安幹男(岡山県)
- 25 災いの無き年になれと願うのみ年号変わる年の始めに
早坂保文(宮城県)
- 26 カミさんと上野の森の美術展フェルメールとムンクが叫び
新井 賢(埼玉県)
- 27 ゆめ希望かなわぬまゝに越年のわれにまぶしき初日出射し
岩崎令子(大阪府)
- 28 新しい春に雪舞ふしづけさに電池換へたる掛け時計鳴る
野木宗信(奈良県)
- 29 枯菊の香りそのままあわれ
石原 岳(群馬県)
- 30 ロボットか異国の人が介護の手
細川光子(栃木県)
- 31 ツンドクをくずしはじめて年を越す
山口静一(東京都)
- 32 舐めて貼る切手に愛をこめながら
青木日出男(群馬県)
- 33 流れゆく水のみつめてはさ木かな
五十嵐睦博(新潟県)
- 34 喜びのパンザイ赤い色だるう
木村洋一(新潟県)
- 35 遅くなると言ったら遅く帰ってね
丸山芳夫(東京都)
- 36 「舌足らず」そんな弁解二枚舌
橋本世紀男(東京都)
- 37 あの頃のふるさと今は夢のなか
鈴木義雄(福島県)
- 38 六周しての干支を生きる
和崎治人(山口県)
- 39 未婚率いびつを招く老婆心
久保壽雄(北海道)
- 40 戦中派には読みにくい世となりぬ
原 崇雄(埼玉県)
- 41 梨の花二十一世紀に咲き誇れ
佐伯セツ子(香川県)
- 42 過ぎし日の想いに浸り年賀読む
守屋高雄(岩手県)
- 43 今何時都会の夜は明かるすぎ
近藤富夫(東京都)
- 44 鬼瓦と少子化語る鯉のほり
小山恵美子(大阪府)
- 45 大黒舞福がまいこむしゃみの音に
阿部澄江(宮城県)
- 46 嬉しかり下手なコーラスアンコール
柳澤京子(宮城県)
- 47 石仏撫でなで亡父母の声を聞く
渡部美代子(山形県)
- 48 平成の最後を飾れ災から福
白松いちろう(千葉県)
- 49 街あるきオアシス本屋のベンチ端
奥 那於子(大阪府)

川柳



- 50 冬帽子似合う恩師逝き給ふ
岩崎政弘(岡山県)
- 51 ゴールするテープあるから頑張れる
目黒豊光(福島県)
- 52 子や孫で忘れかけてた夫婦愛
長谷川庄二郎(千葉県)
- 53 運命に従っている平凡に
西山知子(岡山県)
- 54 政府専用機で世界漫遊は俺だ
伏見の馬酒(京都府)
- 55 あるがまま生きる他なし年暮るる
井原稔子(東京都)
- 56 銀杏散る校舎や大戦語り継ぐ
齋藤麦堂(新潟県)
- 57 読みぞめや句集の一書こ縁ブック
有坂馨園(福島県)
- 58 初しぐれ三国峠を越えてより
川口 襄(埼玉県)
- 59 玉ゆらの命おほゆる雪虫
環 順子(東京都)
- 60 風花や舞い降りすがた清らかに
田中恵美子(山形県)
- 61 焼芋の一口に噎せ病み上り
高崎登喜子(東京都)
- 62 浮寝鳥たゞよひ乍ら暮れて行く
檜山柚子香(東京都)
- 63 手折りては酸味なつかし虎杖草
西條公雄(埼玉県)
- 64 風花に高揚したる舞台かな
日名子春実(群馬県)
- 65 凜としてここに真白き冬の薔薇
村田吉雄(東京都)
- 66 焼鳥賊のほひだたよふ初大師
鈴木清子(埼玉県)
- 67 下手くそと言はれて勇氣初句会
松田重信(埼玉県)
- 68 破魔矢受けポツポツ焼買う初詣
磯部 力(新潟県)
- 69 籐椅子に暫し瞑想通夜帰る
山崎吉晴(群馬県)
- 70 アルデコのランプの明かり毛糸
編む
すずき笑子(東京都)
- 71 ぼろ市や何も見たがるは江戸の常
天野輝子(東京都)
- 72 紅葉散る中ゆく人の美しき
竹本美美子(新潟県)
- 73 米山や白き衣の北陸路
小田ゆかり(新潟県)
- 74 ぼつねんと星空仰ぐ師走かな
大谷 茂(埼玉県)
- 75 落葉掃く音夕空に冪なす
高松玲子(埼玉県)
- 76 気嵐が消え去り海の碧深し
梶 鴻風(北海道)
- 77 年の瀬や忙中閑を句会へと
古閑智子(神奈川県)
- 78 二月三日義母の生誕酒ほがひ
福岡 悟(東京都)
- 79 行く年や喜怒哀楽の三十年
三津木俊幸(千葉県)
- 80 詠みし句の歪みたる字や筆始
杉原明子(静岡県)
- 81 熱爛を断ちて七日やピロリ菌
井上静夫(栃木県)
- 82 七人の敵は老いたりおでん酒
関山恵一(神奈川県)
- 83 渾身の一字一画筆始め
近藤薫也(千葉県)
- 84 年惜しむ雪花菜を食めば母のこと
溝畑美代子(埼玉県)
- 85 越の旅韻を踏む風冬はじめ
上村元義(神奈川県)
- 86 リフォームの槌音響く小春空
中島光江(埼玉県)
- 87 旅行けば七草寺の萩の声
片山茂子(埼玉県)
- 88 若冲の筆に揺れてる枯葉かな
浦橋渴雪(兵庫県)
- 89 善きにつけ悪しきにつけて年暮るる
佐々木素風(新潟県)
- 90 立春や雲悠々と遊びをり
内河邦久(東京都)
- 91 分水嶺過ぎれば釣瓶落しかな
平山千江(岩手県)
- 92 シクラメン初め選んだ鉢を買ふ
青木凉子(埼玉県)
- 93 日向ぼこ心配ごととはごみ箱に
岩村 昇(神奈川県)
- 94 数へ日や西郷どんの声遠ざかる
坪田勝秀(鹿児島県)
- 95 冴返る午前一時の着信音
長峰正晴(千葉県)
- 96 句を杖に旅立つ朝や初しぐれ
阿部徳夫(宮城県)
- 97 義士の日や父は挨拶一基つつ
松尾らん(東京都)
- 98 おでん鍋持ちたる夫の過去問えず
白戸麻奈(東京都)
- 99 山眠るふところ深き親の愛
堅田秀子(東京都)
- 100 温暖化何処へ去り行く雪女
田野倉くにお(東京都)
- 101 夜寒さの募る返信いまだ来ず
大阿久雅子(埼玉県)
- 102 吐く息も白き君を振り向き見ゆ
原田治男(東京都)
- 103 銀杏黄葉掃けど掃けども逃げまど
う
金子範子(高知県)
- 104 合格を祈って送る雪の朝
田村よし(茨城県)
- 105 漆黒の牛に風花浴けにけり
津田卿雲(岡山県)
- 106 産土の杉の枝打ち氏子衆
津布久信雄(東京都)
- 107 平成を難も災なく師走かな
藤井春三(埼玉県)
- 108 ははそばの母の欠けたる年用意
古谷 力(東京都)
- 109 小春日や明日あることを忘れりて
小島岳青(新潟県)
- 110 節分の豆の混じれる雪を掻く
杉村美保子(岩手県)
- 111 湯豆腐や吾にもありし浮き沈み
田中 昶(鳥取県)
- 112 残りしはきみのことばと鯛雲
鈴木岑夫(千葉県)
- 113 揚舟のうつ伏せなせり山眠る
小澤円梨(静岡県)
- 114 手に取れば色即是空初氷
湯浅芳郎(岡山県)
- 115 麹屋の暖簾ふうはり冬ぬくし
小林七重(新潟県)
- 116 新米の湯気まで白い晩御飯
中嶋清子(佐賀県)
- 117 特等地得て南天の輝けり
重原爽美(新潟県)
- 118 時雨るるや里の奥なる旅の宿
吉村充治(埼玉県)
- 119 夜学の灯天下うならず日もあらむ
居原田暹(大阪府)
- 120 生きてきたことをかみしめ紅葉散る
岩田 信(神奈川県)

- 121 去年今年生きて心の舵を取る
大塚徳子(埼玉県)
- 122 手がきれいな今が一番生身魂
浅海和代(東京都)
- 123 秋深む大樹は空をつかみおり
水落重式(新潟県)
- 124 枇杷咲いて今年も終わりなりにけり
濱田イサオ(福岡県)
- 125 冬の雨墨絵になりし古利かな
平林義康(兵庫県)
- 126 啓蟄やてんやわんやの土の中
松前邦広(千葉県)
- 127 点滴のしずくを数え十二に入る
河野静子(埼玉県)
- 128 忘れじとメモを片手に年の暮
中田文子(大阪府)
- 129 柚子の香の仄かに独り暮しけり
青木ケン子(埼玉県)
- 130 プレゼントいとしのの人に手渡せず
湯浅暉子(石川県)
- 131 挽きたての柿み吉野の香を連れて
大窪美代子(大阪府)
- 132 終活の想いを架せし年賀状
長谷部喜代子(大阪府)
- 133 居先の身を写したる成人の子
清まさじ(静岡県)
- 134 去年今年催馬楽奏上神楽殿
山田富朗(埼玉県)
- 135 猫型のリュック背負ってクリスマス
星 一子(神奈川県)
- 136 万病の一つを抱き日向ぼこ
佐野和彦(静岡県)
- 137 枯鳶の窓や第九の大合唱
本庄準也(埼玉県)
- 138 老いてなお心躍らす春支度
大橋恒次(新潟県)
- 139 文机の小抽斗にも淑やかな
今井勝子(新潟県)
- 140 爛酒で昭和の匂ひ逃がすまい
北野耕兵(千葉県)
- 141 おだやかに冬日のさして地鎮祭
佐藤 信(神奈川県)
- 142 十二月思いがけない喪の葉書
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 143 アナログに年を重ねて去年今年
堀口 伸(埼玉県)
- 144 しろがねの淡雪残る土橋かな
間森 坦(兵庫県)
- 145 どんど焼皆少しづつ長居して
中村康浩(福岡県)
- 146 鯛焼をひとつ多めに買って来る
若林卓宣(三重県)
- 147 舞う落葉災の一年案じつつ
木村 舂(山形県)
- 148 まわり道これも人生花八手
井田由利子(宮城県)
- 149 あうらより迫りくる来る大寒波
永田歌子(埼玉県)
- 150 けふの日を静かに均す寒夕焼
寺内 侑(埼玉県)
- 151 活き活きと咲く山茶花や眩しすぎ
堀田寿美子(北海道)
- 152 平成も終の年なる初句会
中野勝子(鹿児島県)
- 153 喜怒哀楽生きて平成年惜しむ
岡村君枝(茨城県)
- 154 顎引いて師走の街の人となり
川嶋法子(東京都)
- 155 色選び咲きしごとくにシクラメン
若月理依子(新潟県)
- 156 平成や喜怒哀楽の年終る
井上氣海(広島県)
- 157 笛音は魔女の私語月冴ゆる
一瀬正子(埼玉県)
- 158 鏡餅仏壇に皆鎮坐せり
油谷博子(兵庫県)
- 159 寒気をばグラウンドの声吹き飛ばし
宇都木安子(東京都)
- 160 労りの千秋万歳平成尽
九法活恵(埼玉県)
- 161 赤鬼も青鬼もゐて去年今年
吉里ひとみ(東京都)
- 162 瑞雲のオーロラの如初御空
鏡たか子(山形県)
- 163 産土に鈴の音渡り淑気かな
中川義彦(新潟県)
- 164 まんさくの浮かれてゐたる日和かな
服部八重子(東京都)
- 165 キュキュと鳴く長靴の下雪雀
田中こづえ(北海道)
- 166 たたずめば色なき風に父の声
本間 進(新潟県)
- 167 綿雪の花まどふかに枯古木
本間ミネ(新潟県)
- 168 神無月神事で友は出雲路へ
中山日出子(大阪府)
- 169 太平洋見はるか立つ開戦日
中澤寿美(神奈川県)
- 170 テレビはニューイヤークンサートに
限る
光成高志(千葉県)
- 171 あるままのいのちが杖や米寿春
村山徳英(埼玉県)
- 172 すめらぎの長寿を祈る水仙花
齊藤安弘(神奈川県)
- 173 嘘ちよつと混ぜてシミとる雛遊び
椋本望生(大阪府)
- 174 うすれゆく昭和の歌よ年忘れ
柴田恵美子(北海道)
- 175 紅白見孫に合わせる老の春
清水君江(埼玉県)
- 176 雪吊の城門くぐる鳥の影
桜井葉子(千葉県)
- 177 八月十五日襤褸の繕い母の顔
島村幸重(兵庫県)
- 178 酒有りて古き雛と宵語り
奥田君子(神奈川県)
- 179 前掛けの二重結びや春立てり
高垣勝代(大阪府)
- 180 縄文の我も裔なり牡丹鍋
望月哲土(東京都)
- 181 雀語の天より降り来初明り
安田芳江(茨城県)
- 182 又一つ凍星ふえし別離かな
倉沢ひとみ(静岡県)
- 183 飛機の窓眼下にただよういわし雲
沖 惇子(大阪府)

フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：中川三郎さん)

184 雪山に五つの右手楽しさう
井原毬子(東京都)

185 雪で手の汚れをとってから握手
石原 岳(群馬県)

- 186 杖ついて右手で手形五つ押す
青木日出男(群馬県)
- 187 手の込んだ雪ん子さんのアートかな
五十嵐陸博(新潟県)
- 188 幻覚かまだそのへんに雪女郎
高崎登喜子(東京都)
- 189 新発見インカの遺跡謎深し
橋本世紀男(東京都)
- 190 冬風へ託す来し方九十路
日名子春実(群馬県)
- 191 雪女郎遊び心を白く染め
松田重信(埼玉県)
- 192 初雪に手形のこして登校し
和崎治人(山口県)
- 193 雪山に手形残して直滑降
山崎吉晴(群馬県)
- 194 雪の上五手が後手に獣道
有田裕子(北海道)
- 195 雪深く明日には見えぬ手形かな
天野輝子(東京都)
- 196 雪に圧す人の手形と狗の足形
梶 鴻風(北海道)
- 197 春は立つ足跡刻み手に託す
福岡 悟(東京都)
- 198 犬つれて手を振つてゐる冬の浜
こんくを(東京都)
- 199 年の暮五人の誓ひ忘れまじ
近藤薫也(千葉県)
- 200 初雪に残す手足のモニュメント
片山茂子(埼玉県)
- 201 右手重ねて五人組
佐伯セツ子(香川県)
- 202 道草の下校児五人雪遊び
平山千江(岩手県)
- 203 教へて下さい雪女郎の手子供の手
岩村 昇(神奈川県)
- 204 宇宙人の砂に残したメッセージ
長峰正晴(千葉県)
- 205 私も遺す生きてきた苦勞の手
小山恵美子(大阪府)
- 206 不思議だな一体何の足跡か
阿部徳夫(宮城県)
- 207 グーとパーチョコキはどこかにいつ
ちゃった 阿部澄江(宮城県)
- 208 新雪に家族の手形消さないで
堅田秀子(東京都)
- 209 新しいナスカの地上絵が見つかった
の? 濱崎祥子(鹿児島県)
- 210 友情の雪の手形や又ここに
大阿久雅子(埼玉県)
- 211 嬉々として手形並べて冬麗ら
津田卿雲(岡山県)
- 212 足のあとすがたみえず大雪原
渡部美代子(山形県)
- 213 足あと手形と花が咲く白一面
大鳥居牧子(東京都)
- 214 初雪に歓喜の手形腕白ども
藤井春三(埼玉県)
- 215 凹むものに均らすものくる薄暑浜
安部 哲(新潟県)
- 216 犬は足跡わたしは手形秋の浜
鈴木岑夫(千葉県)
- 217 懐かしき手形に合はす日脚伸ぶ
小澤円梨(静岡県)
- 218 白鳥は今着地かの雪景色
田中豊恵(新潟県)
- 219 どか雪に万歳三唱雪男
居原田暹(大阪府)
- 220 新雪や犬つれて手を押ししてみる
水落重武(新潟県)
- 221 宇宙船手形残して月を去る
松前邦広(千葉県)
- 222 歩きつつ手形犬足砂浜に
河野静子(埼玉県)
- 223 地上絵か右手両足なぞの跡
合田浩子(茨城県)
- 224 右利きの手形なりけり冬の浜
星 一子(神奈川県)
- 225 新雪や獣足跡人手形
佐野和彦(静岡県)
- 226 待て! まで魔手と金の魔術のカルロ
スゴーン 本庄準也(埼玉県)
- 227 ガラスに絵雪には手形のはしこい子
奥 那於子(大阪府)
- 228 大人は手形子供はチンチンパッ!
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 229 初春や五年B組またやるぞ
井田由利子(宮城県)
- 230 遠足や記念に手型密に捺す
寺内 信(埼玉県)
- 231 悪餓鬼の五人の右手雪の上
中野勝子(鹿児島県)
- 232 さあ行くぞ手形を残し雪山へ
岡村君枝(茨城県)
- 233 仲良しの登校前のひと遊び
川嶋法子(東京都)
- 234 手をた、き仰ぐ空にはすずめ鳴く
高橋登志子(新潟県)
- 235 平成にサヨナラ告げた雪男
長谷川庄二郎(千葉県)
- 236 ロボットのよむこの一句知りたし
宇都木安子(東京都)
- 237 UFOの足跡らしき雪に華
九法活恵(埼玉県)
- 238 犬の跡手形可愛ゆし雪の上
鏡たか子(山形県)
- 239 思い出につけて楽しき手形かな
本間 進(新潟県)
- 240 手のひらの生きた印や年の果
関原幸子(東京都)
- 241 約束は30年後きつと来る
守安幹男(岡山県)
- 242 この標何が何やら誰なのか
齊藤安弘(神奈川県)
- 243 ぽぽぽぽとぽぽぽとゆく雪の果
椋本望生(大阪府)
- 244 砂浜に右手を五つ置き帰る
安田芳江(茨城県)
- 245 はいタッチお手々ひろげて待つてま
す 岩崎令子(大阪府)
- 246 冬の浜旧友五人と誓い合い
鈴木金雪(京都府)

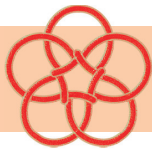


俳句・川柳募集!!



右の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!

(写真提供: 伊丹三樹彦さん)



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎川柳部門

12 残り火があつて終活間延びする

木村洋一(新潟県)

・自分自身のことのようにだ 近藤富夫
(東京都)・終活への複雑の心理を「残り火」と上手く表現した 目黒豊光
(福島県)・いつまでも長生きはしたい
ものです 井上氣海(広島県)

18 百薬の長を友とし八十路生く

久本にい地(岡山県)

・好きなものを食べて飲んで元気に過ごせることは本当に幸せですネ！ 和崎治人(山口県)・飲むのがほどほどでうまいのですかね！ 原 崇雄(埼玉県)・夜一杯の晩酌を楽しみに一日の疲れを流し喜びに浸る。老後の豊かな日々を送られています 津田卿雲(岡山県)

22 老いたって夢はしっかり抱いている

西山知子(岡山県)

・夢は一生失いたくないですね 細川光子(栃木県)・年を重ねても前向きな気持ちを保っているのがステキです 久保壽雄(北海道)・長寿社会を生きる私たち。漫然と暮らすのではなく夢を抱くことが大切です 久本にい地(岡山県)

◎俳句部門

113 や・かな・けり捨てつ拾いつ秋の夜

鈴木公子(千葉県)

・作句の苦労が伝わってくる一句。私も同様のことが多々あります 三津木俊幸(千葉県)・面白くなかなか思いつかない作品です 片山茂子(埼玉県)・

よい俳句をと「や」とか「かな」とか「けり」など使い道が難しい 水落重武
(新潟県)・同感です 大窪美代子(大阪府)・初心者にはとてもいい得て妙なるかなです 北野耕兵(千葉県)・句作りの苦労共感しました 岡村君枝(茨城県)・句作の苦労を俳諧味たっぷりに表現され面白い作品と思います 清水君江(埼玉県)

72 「人肌」は妻のみぞ知る爛の酒

長峰正晴(千葉県)

・銀婚式を越えた妻のなせる業です 山崎吉晴(群馬県)・お酒の爛のつけ方はとても微妙ということ。私も父との晩酌でよくわかります 阿部澄江(宮城県)・ご夫婦の深い愛情：優しい笑顔まで浮かんで参りました 堅田秀子(東京都)・若くして亡くされた奥様を想起しての句とされます。夫婦愛がにじみでています 吉村充治(埼玉県)・夫婦円満 岩崎政弘(岡山県)・奥様のあたたかさが伝わってくる作品でした。小生は「レンジ爛」です 中川義彦(新潟県)

31 風に寝て風に起こさる秋桜

高崎登喜子(東京都)

・自然との調和発見 福岡 悟(東京都)・写生のきいた佳句 平山千江(岩手県)・秋桜の習性をよく表している。人の世も同じ事が言える 大阿久雅子(埼玉県)・秋桜がよく言い尽くされてすんなりと胸に入ってきます 井田由利子(宮城県)・秋桜の感じがよく出ています 椋本望生(大阪府)

73 平成の終りを告げる除夜の鐘

内河邦久(東京都)

・たしかに今年の除夜の鐘は平成の聞き納めになる。いいポイントに目を付けました 井上静夫(栃木県)・国民として誰でも理解する納得の一句でした 重原爽美(新潟県)・平成年代も終るとこの句で諦めがつかました 湯浅暉子(石川県)・平成時代が終るかと思ういろいろな感慨がよぎる。良い時代が来るように 大橋恒次(新潟県)・この句の如く除夜の鐘を聞きました 間森 坦(兵庫県)

132 打掛けの鶴の羽ばたく良夜かな

一瀬正子(埼玉県)

・華燭の典、最高の祝意を感じます 日名子春実(群馬県)・娘の婚禮だろうが、誰もが幸せになる一句 こんくに(東京都)・お嬢様の結婚を控え、花嫁衣裳を前にした母の喜びが表われている 関山恵一(神奈川県)・なんと美しい光景でしょう！打掛けの鶴に命が吹き込まれました 小林七重(新潟県)・豪華な花嫁衣裳が目に見えかけて来ます 永田歌子(埼玉県)

◎短歌部門

169 失言と嘘と隠蔽はびこれる神聖なはずの国会議事堂

黒澤正行(福島県)

・低劣議員、大臣のおそまつは歌にするのも恥しい 石尾曠師朗(東京都)・何やってくるの先生たち、だから投票率も下がって半数しか行かない。大臣になりすぎに又 佐伯セツ子(香川県)・国民に寄り添う政策とは口ばかりで国民が政治から離れてゆく。危険です 坂元正憲(東京都)

172 面倒な世の中にする消費税軽減税率混乱必至

坂元正憲(東京都)

・平成の問題を次世代へのつけに：大橋絵代(千葉県)・全く面倒な世の中 高須 孝(愛知県)・全く同感です。どうなるかと心配しても考えても仕方ありませんが：張山てる子(東京都)

◎他にも

1 年重ね時に三猿生きる術

石原 岳(群馬県)

8 平成の最後の干支は牙納め

近藤富夫(東京都)

29 秋茜風を乗り替へ夕空へ

川口 襄(埼玉県)

56 今昔の話の尽きぬおでん酒

天野輝子(東京都)

142 生きるとは鳴き尽くすこと虫しぐれ

こんくに(東京都)

177 時空超え再生の祈り伝える土偶の世界に思いの探し

関原幸子(東京都)

188 枯野原初恋隠す一歩かな

福岡 悟(東京都)

191 郵便夫稲架に自転車昼餉時

津田卿雲(岡山県)

※年間大賞は次号での発表を予定しています。
※今後ふるってご投稿をお願いいたします！

Q 前回のアンケート
平成という時代に感謝
したいことは何ですか？

★家族・孫

- ・家族が増えて孫も授かりました
古閑智子(神奈川県)
- ・家族全員が健康に過ごせたこと
近藤薫也(千葉県)
- ・家族と共に穏やかで平和で楽しい年を重ねてこられた
阿部徳夫(宮城県)
- ・子供が無事社会に役立つ仕事につけた
松尾らん(東京都)
- ・我が子供達孫達の成長した時でした
金子範子(高知県)
- ・家族一同安全に暮れたこと
鈴木岑夫(千葉県)
- ・家族みんな元気で過ごせた
小澤円梨(静岡県)
- ・子供たちがみな結婚し孫が誕生し家族がにぎやかになったこと
桑原謙一(群馬県)
- ・子供に良縁があったこと
平林義康(兵庫県)
- ・子供達三人の家族が無事成長し孫達も揃って私を支えてくれた事
岡村君枝(茨城県)
- ・家族が殖えた事 鏡たか子(山形県)
- ・孫の男の子が二人、平成一桁生れ。孫が小学生のころの川柳「孫二人一日を聞く夕餉どき」
石原 岳(群馬県)
- ・平成元年に生まれた孫が立派に育った事に安心と感謝
片山茂子(埼玉県)

- ・曾孫を二人授かったこと
高崎登喜子(東京都)
- ・孫二人が元気に育ち学業に励んでいる事
中沢敬子(千葉県)
- ・子が結婚し孫ができて楽しみがふえたこと
長峰正晴(千葉県)
- ・ひまごにも会えて感謝いたしました
高須 孝(愛知県)
- ・孫達の成長。それぞれプロの道歩んでいるのを見て元気を貰います
柳澤京子(宮城県)
- ・孫が誕生し社会人に成長したことの喜びです
中田文子(大阪府)
- ・孫の成長を楽しめたこと、今後も続くこと
本庄準也(埼玉県)
- ・四人の孫が高校、中学、小学生になり元気に通学するように。大きくなりました
間森 坦(兵庫県)
- ・孫が二人、今は自分の進みたい目標に向かって頑張っています
関原幸子(東京都)
- ・亡夫の介護で大変な時期もあったが孫たちが次々と楽しみを与えてくれたことは有難く思っています
西山知子(岡山県)
- ・二人の曾孫が生まれた事
沖 惇子(大阪府)

★平和

- ・戦争がなかった事は一番ですね
青木日出男(群馬県)
- ・平和を体感 石尾曠師朗(東京都)
- ・ともかくも平和であったこと
鈴木清子(埼玉県)
- ・「平和」のバトンを次世代へリレーできること
松田重信(埼玉県)
- ・戦争がなく平和で安心しました
五味田幸夫(東京都)

★天皇

- ・憲法九条が残りの(これからも残したい)戦争がなかったこと
佐藤 信(神奈川県)
- ・平和を実感させていただきました
大谷 茂(埼玉県)
- ・日本国民の平和への希求
福岡 悟(東京都)
- ・平和憲法が守られ徴兵制度がなかったこと
大橋絵代(千葉県)
- ・昭和、平成と生き延びて感無量
大橋恒次(新潟県)
- ・戦争のない国の穏やかさ：平和……という大事なことから感謝
木村 舳(山形県)
- ・第二次世界大戦の戦中・戦後の苦しみを経験している者として「平和」であったこと
寺内 侷(埼玉県)
- ・何と言っても戦争がなかったことに尽きる
目黒豊光(福島県)
- ・平和に暮せることに感謝
川嶋法子(東京都)
- ・戦争が無かったこと、そのひとつに尽きます
中山日出子(大阪府)
- ・私の俳句「平和ほけそれこそ理想終戦日」
橋本世紀男(東京都)



- ・天皇、皇后が国内の被災地を見舞われた事に感謝感激
吉村充治(埼玉県)
 - ・平成天皇、皇后が、国の象徴として日々努力なさっていたこと
合田浩子(茨城県)
 - ・ご高齢の両陛下が被災地をまわられること
峯岸信子(東京都)
 - ・平成の天皇として国民守り、励まし被災各地を歴訪した下さった事や国内外各地への慰霊の旅に感謝
坂元正憲(東京都)
 - ・天皇、皇后両陛下下の国民への祈りの数々
桜井葉子(千葉県)
 - ・皇室にとっても興味を感じました
島村幸重(兵庫県)
 - ・よい天皇・皇后に恵まれて幸いであつた
望月哲士(東京都)
- ★日本の絆
- ・災害の多い時代だったが困っている人たちのボランティア活動参加者が増えたこと。ありがとう!!
三津木俊幸(千葉県)
 - ・自然災害に注意して全国民絆を強くして新元号は明るく頑張りたい
渡部美代子(山形県)
 - ・災害が多かったが無難にのりこえたこと
水落重武(新潟県)
 - ・東日本大震災等、人と人が助け合い支え合う体験をし、人のよさを改めて感じさせられた
早坂保文(宮城県)
- ★医療
- ・医療の発達で充分な治療が受けられたこと
濱崎祥子(鹿児島県)
 - ・医療が次第に十分になって治療が早くなった
浅海和代(東京都)

・人生百年時代、食糧も豊かで医療も充実しており幸せを感じます

久保壽雄(北海道)

・平均寿命や健康寿命がのびたのは科学技術が飛躍的に発展したから

今井勝子(新潟県)

・医療技術の進歩で病を克服でき今も歩ける身体の平成に感謝

北野耕兵(千葉県)

・障がい児・者を支援する教育、医療、社会福祉が革新的に進化した

中村康浩(福岡県)

・医療の進歩・普及

中澤寿美(神奈川県)

★情報社会

・インターネットからロスチャイルド・デイトンネットの実体を知り得たこと

宇都木安子(東京都)

・インターネット等のハイテクが進んだ

中川義彦(新潟県)

・通信が発達してインターネット等が身近になった

新井 賢(埼玉県)

・平成生れの孫の子供が健やかに遊ぶ様子をタブレットで見られる事に感謝

田中豊恵(新潟県)

・LINEは、子孫、友人も繋がっている

倉沢ひとみ(静岡県)

・孫の様子がLINEで解ること

内藤明子(東京都)

・三十年全て健康だったこと

内河邦久(東京都)



・長寿王国となり健康王国となった

居原田暹(大阪府)

・俳句を通じて多くの友を得たこと。82才で富士登頂したことへの健康を感謝!

関山恵一(神奈川県)

・川柳の講師として公民館、介護施設に行つたこと

岩崎政弘(岡山県)

・主人を亡くして14年余り。一人で生きて行けないと思つたのに何とか俳句講師としてやっています

井原毬子(東京都)

・平成元年は私の俳句元年。俳句に感謝

環 順子(東京都)

・定年退職した後、短文芸に親しめたこと

久本にい地(岡山県)

・俳句とぶつかった

白戸麻奈(東京都)

・俳句づくりの楽しさに出会えた。良師、良い句友に出会えた

一瀬正子(埼玉県)

・俳句に出合えたこと(毎日が俳句三昧です)

九法活恵(埼玉県)

・京男と結婚して本格的に俳句を始めて平和だった

吉里ひとみ(東京都)

・俳句という世界を知り楽しみが増えたこと

本間 進(新潟県)

・川柳は平成になってから十五年、継続出来ている環境に感謝

長谷川庄二郎(千葉県)

・文芸活動を通じて地域住民との温かい交流―恵まれた老後

村山徳英(埼玉県)

・無学でも作品が良ければ入選する。自分の作品がテレビで放送されることなど夢にも思わなかった

黒澤正行(福島県)

・「お国のために」と工場へ通勤した事を一年半かけて冊子を作って後世に残せたこと

天野輝子(東京都)

・句集を上梓できたこと

古谷 力(東京都)

・歌集を発行できたこと

夏井寛治(新潟県)

・喜怒哀楽誌に投稿を始めた

西條公雄(埼玉県)

・喜怒哀楽誌との縁ができた

鈴木恵美子(東京都)

・わずか三十年間に多くの社会現象が経験出来感謝

齋藤光雄(新潟県)

・すばらしい先生、友人に出会えたこと

小田ゆかり(新潟県)

・平成のバブル、安く飲めました。有りがとう

原 崇雄(埼玉県)

・旅の折々に美しい日本に出会えたこと。特に知床の星空は忘れられない

高松玲子(埼玉県)

・遣り甲斐のある仕事を平成の時代にやれたこと

こんくにを(東京都)

・鎌倉彫が20年続いたことなど

溝畑美代子(埼玉県)

・平成元年に家を買って三十年、娘二人も嫁ぎ無事に生きて川柳もして好きな事ができたことに感謝

小山恵美子(大阪府)

・人生百年へ向け力強く生きた事

田野倉くにお(東京都)

・夫の介護に大勢の方の温かいご支援を頂いたこと

大阿久雅子(埼玉県)

・65才まで勤めて年金がいただけること

松尾正一(岩手県)

・交通、輸送が飛躍的に向上したこと

田中 昶(鳥取県)

・恙なく様々な人生経験を積むことのできた三十年

小林七重(新潟県)

・無事定年退職をむかえられたこと

岩田 信(神奈川県)

・健康でいられた事に感謝。退職して二十年間自分の好きな趣味やボランティアに満悦

松前邦広(千葉県)

・食べたい物を食べ、着たい物を着て、好きなままに暮らせた

湯浅暉子(石川県)

・物が沢山ある事。食物もめずらしき物ばかり

清まさじ(静岡県)

・前半仕事をする大変さを経験し、後半家族二人の介護で暮れた。自身の体がよくもってくれたと感謝

奥 那於子(大阪府)

・カラオケブームにダンスブーム、はてさて俳句の復権も。お陰で定年後大いに楽しめた事

仁藤ひろじ(埼玉県)

・次世代が順調に育っている事

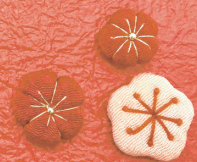
永田歌子(埼玉県)

・平成と共に社会人としてスタートしましたので私を育ててくれた時代

若月理依子(新潟県)

編集室だより

生きているといろんなことが起こります。一日の中でもあんなこと、こんなこと、ほんといろいろとありますね！ そんな日常に転がる喜怒哀楽を、編集室よりお届けします。



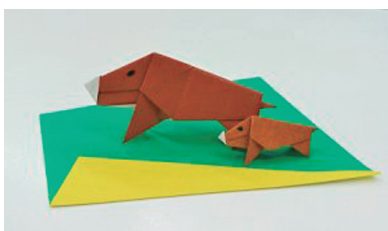
●わが社の年末年始

新年おめでとうございます。大掃除をして年末を締めくくり、書き初めとともに2019年をスタートしました。

したためるのは、「今年の一文字」。それぞれ今年にかける思いを書き込めました。ホームページで「一文字に込めた思い」を紹介していますので、ぜひご覧ください。スタッフ写真も年始に撮影して更新しています。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。



●可愛いプレゼント♪



お客さまから、折り紙の猪をいただきました。玄関に飾っています。困難を乗り越え、元気に進む猪です!!

●見本、お送りいたします

ご希望のお客さまには無料で句集・歌集の見本をお送りしております。「本をつくってみたいけど、本文（中身）の体裁や文字の大きさ、書体をどんなふうにしたらいいか分からない…」などと迷っている方、お気軽にお問い合わせください。



●角川「俳句」に！

実は、角川「俳句」に広告を掲載しています。ご購入されている方は探してみてください(笑)。

●本誌の読者になってくれる方、募集中！

本誌「喜怒哀楽」がもっとたくさんの方で盛り上がるマガジンになるといいなと思っています。本誌の読者になってくださる方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介ください。一緒に詠み人の輪を広げていきましょう。



●「詠み人応援マガジン 喜怒哀楽」基金を考えています

2018年12月に無料化した本誌「喜怒哀楽」の想いに共感、温かく応援くださる皆さまに深く感謝いたします。継続発行し、「喜怒哀楽」が皆さまの広場であり続けられるよう、基金を設けようと考えております。「こんなふうにしたらどう?」「こんな方法があるよ」等のアドバイス・ご指導をいただけたら嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。

●本の修理、合本 承ります！

お手元に壊れかけた大切な1冊はありませんか。日が経つにつれますます劣化します。剥がれたり、破れたりした貴重な1冊、絶版になった1冊をきれいに修理します。また、何冊もの冊子や月刊誌を1冊にまとめて製本（合本）もいたします。お気軽にお問い合わせください（同封のチラシ参照）。

コラム 製本の繁忙期？

製本工場の繁忙期は、2月中旬～3月末。一年間の仕事の約20%がこの時期に集中し工場は24時間稼働となります。喜怒哀楽書房と同じ建物内にある木戸製本所も、この時期は大忙しです。





良寛と相馬御風・會津八一

伊豆名 皓美

新潟を代表する文人・良寛(りょうかん) (1758~1831) は、江戸時代の禅僧です。良寛は出雲崎の名主の跡取りとして生まれましたが、18歳で出家し、家業は弟に託しました。曹洞宗の僧として諸国で修業した後、39歳頃になって故郷の越後に戻り、燕市国上山に庵を結んで暮らしました。自分の寺を持たず、基本的には弟子も取らず、風変わりなお坊さんと評されましたが、日が暮れるまで子どもたちと手毬で遊び、地元の人々には親しまれていました。

良寛の没後にその書や詩を評価した文学者には、夏目漱石、會津八一、相馬御風、堀口大學らがいます。彼らは西洋文学を学んだ近代的視点を持っていました。彼らによって、古めかしい中国風の文人とは異なる、西欧的ヒューマニズムの観点から成る新たな人間・良寛像が生み出されたのです。

明治以降に良寛が広く知られるようになったのは相馬御風(1883~1950)の研究によるものと言われています。御風は糸魚川町(現糸魚川市)に生まれ、明治から昭和にわたり歌人・詩人・自然主義評論家・作詞家・郷土研究者として活躍しました。早稲田大学卒業後、恩師島村抱月のもとで『早稲田文学』の編集に参加し、自然主義の論客として評論を執筆しました。それと同時に、早稲田大

を馳せ、口語自由詩を提唱し自由な言葉とリズムによる新しい詩を主張しました。東京で精力的に活動しましたが、1916(大正5)年、33歳の時に故郷への帰住を決意します。それからは、早稲田大学の同級生であり同郷の歌人・會津八一(1881~1956)の勧めにより、良寛研究に没頭しました。御風は、1918(大正7)年に刊行した『大愚良寛』で良寛の生涯とその芸術について論じ、子どもとかくれんぼをしたり、毬つきを楽しんだりといった良寛にまつわる逸話を紹介しています。ここでは、良寛が生涯子どもたちと遊ぶことをやめなかつたこと、それが彼にとつて最も貴い修養であったと述べています。御風は当時、トルストイなどの影響を受けた人道主義的な観点から、良寛を「愛の人」と捉えていました。子どもと毬つきをする良寛が童心の人であるというイメージが広く普及し、定着したのには、『大愚良寛』刊行の5か月後に児童雑誌『赤い鳥』が創刊されたことも影響しています。御風の良寛論が、中央の文壇で大いに流布された童心主義の風潮と結びついたのでした。

こうして、現代の我々になじみ深い良寛像は、主として相馬御風によって作り出されました。それまでは郷土の偉人として知られるに過ぎなかつた良寛でしたが、御風によって明確な良寛像が作り上げられ、それは折からの宗教ブームを背景に全国的に広まったのです。會津八一はそのさまについて、良寛を誰にでも親しめるお坊さんにしたのは御風の手柄であると述べています。私たちは、相馬御風の研究により、彼の目を通して良寛を見ることもできるのです。



▲會津八一



▲相馬御風



▲良寛

【展覧会情報】

企画展示「良寛再発見」

会期：2月22日(金)から3月21日(木・祝)
休館日：月曜日

“ありがとう”俳句人生に乾杯!

1

前回まで「食楽句楽」のコーナーで縦横無尽にペンを走らせていただいた岩田桂さま。今回より、俳句によって人生をより豊かで充実したものとされてきた、その俳句人生の一端を6回にわたり雄弁に語っていただきます。

これが我が俳句人生のはじまりです

岩田 桂

私の俳句人生は、いつ、どこで、どうして始まったのだろうか。俳句を我が恋人や相棒として何時から楽しむようになったか。その発端を書き記して、俳句に関心のある方々にメッセージをお送りいたしたく、ペンをとっております。ご笑読ください。

俳句人生のこの発端は、一九八八年の桜の頃でした。私が四十五歳のころです。職場の多くの仲間と東京の市ヶ谷での花見の宴で、ワイワイと騒ぎながら酔いしれていた時、誰かが「俳句を詠もう」と声を挙げました。

すると「うんだ、うんだ」と数人が桜を見上げながら詠み始めました。さらにK君がそれを集めて読み上げます。もちろん俳句の先生や講師は不在です。

そしてその選句を私がやることになり、えいやあ〜と三句を選び、大声で発表です。その時の一句が「さくらさくらなんでお前はさくらかな」でした。もちろんこの俳句には、爆笑と拍手が起こりました。およそ俳句らしからぬ作品でした。

が、人生とは不可解な奇跡が起こるものです。そのK君が俳句会を立ち上げようと動き出したのです。句会の名前は「パッ句同好会」です。その主宰を私が受け持つことになり、その後二〇数年、この句会は休みなく活動することになりました。

もちろん素人ばかりの二〇名ほどの集団です。俳句道の達人はいません。さらに句づくりの能力も簡単には上達しません。やがて句会も次第に衰退していききました。そうこうしている時に、私に感激の出来事が起こりました。

私になんとなく投稿した朝日俳壇への投句が入選して、新聞に

載ったのです。

金子兜太先生が選んでくださった一句です。

『土筆摘む母まじめなり無口なり』です。いやあ〜驚きました。ビビりました。それを知った母は、目を赤らめて喜んでくれました。泣きました。そしてそこから私の朝日俳壇への挑戦が始まりました。それからすでに二〇数年続いています(笑)。

しかし多く存在する俳句結社や、プロの俳人とは、まったく無縁の私としては、俳句の基本やマニュアルを身につけねばなりません。役目があります。その資料や本を探し求めて、多くの書店や図書館を訪ね歩きました。

その資料の中で、一番の教えを受けた資料があります。それは次の書籍です。

『俳句―四合目からの出発―』 (阿部脩人著 講談社)

日本の俳句界では長い間、禁断の書として読み継がれてきたマニュアル書です。

私は日夜を通して読み耽りました。およよ、ええええ、うんうん等とうなり声をあげながら、まさに俳句の神様に、お目にかかるような自分の日々が続きました。

その著書が私の生涯の俳句の先生となり、新たな人生訓となりました。ただし手もペンも動かない程の、それほどに厳しくて衝撃的な俳句論の聖書です。しかもこの本を勧めた句会の仲間の多くは、腰がひけて俳句界から去っていききました。シヨックの多発です。

このような過程を経ながら、私たちの月刊誌「四季の作品鑑賞」の編集や「パッ句同好会」の活動を始めました。月一回のこの俳句会とその後懇談会や飲み会には、様々な仲間や初心者に参加され、セカンドライフの俳句人生を謳歌しております。お酒がすごく美味しい。

次号では、これらの俳句人生の喜怒哀楽をレポートいたします。乞うご期待です。



「俳句一草庵」の俳句募集

一草庵リニューアル10周年、山頭火来松80年、松山市制130周年を記念し、例年開催の「俳句一草庵」を発展的に開催。

開催日／平成31年4月29日(月・祝) 13～16時

会場／一草庵(松山市御幸1丁目)

投句締切／4月10日(水)〈投句料は無料〉

- ・ハガキ1枚に一人2句まで(未発表作品)。
- ・住所、氏名、年齢、電話。小中高生は学年を明記。
- ・有季、定型・自由律のジャンルは問いません。
- ・各俳句賞は、一次選考の中より、当日公開選抜。入選句は新聞に掲載、記念品あり。

〈募集句選者〉池田澄子、權未知子、神野紗希、

佐怒賀正美、鶴田育久、水内慶太(敬称略)

〈募集句・当日選者〉小西昭夫、白石司子、高橋正治、

福谷俊子、本郷和子(敬称略)

〈送付先〉〒799-2651松山市堀江町甲1615-3

NPO法人まつやま山頭火倶楽部

電話090-6882-0004

第34回 太宰治賞受賞の錦見さんによるエッセイ

本誌「喜怒哀楽」の「詠み人のリレーエッセイ」に執筆くださった歌人・錦見映理子さんの著書『めくるめく短歌たち』(書肆侃々房)が発売されました。「NHK短歌」で連載のエッセイ「えりこ日記」を中心に収録。本誌からは「トクさんのこと」「ごうごうおじいさん」が掲載され、歌人の穂村弘さんとの対談も。何気なく開いたページでも、ぐぐっと引き込まれてしまいます。手元に置いて折々に読みたくなる一冊、ぜひ。(書店でお買い求めください)



佐藤りえさんの第一句集

本誌「喜怒哀楽」の「詠み人のリレーエッセイ」に執筆くださった俳人・佐藤りえさんが『句集 景色』(六花書房)を出版されました。2003年以降の333句を収めた一冊は「地球外生命体から猛禽類まで、有機物から無機物まで、すべてのクリーチャーに捧げる俳句集」(帯文より)。オリジナルの視点が、読む人に知的な驚きを与えます。(書店でお買い求めください)



野菜のポストカード

1セット12枚入り1000円(送料込み)。今回はアスパラ菜を同封しました。美味しそうな野菜で、季節のメッセージを送りませんか。ご注文は同封の振込用紙をご利用ください。



スタッフの一言

Q. 平成という時代に感謝したいことは何ですか?

※新年の書初めを手に。この字にける思いはHPで紹介しています。

木戸 敦子



平成元年に卒業、社会に踏み出し、新入社員研修では「敬語を使えない廣川(旧姓)」と言われた世間知らずで常識皆無の私を、人たらしめてくれた平成に出会った全ての方々に感謝!

古川久美子



新幹線ありがたい!!って思ったのですが、平成の発明ではなかった(笑)。新幹線のおかげで、こんなに色々出かけるのにねえ。でも、生まれてからずっとあるもの。ほぼ平成だろ、上越新幹線。

菅 真理子



女性でも勉強をさせてもらえ、自分の意志で職業を選択できたこと。お花を見てうっとりしたり、美味しいものやお喋りを楽しんだりできる平和さが尊い。

山田 民子



出産、子育てをし、その子供が、平成最後の成人式に出席しました。大変で、でも素晴らしい時間でした。平成 ありがとう。

木伏美恵



平成の半分以上は親に守られ、周りに守られ平和でのほほんと過ごさせてもらいました。今の私をつくってくれた環境、厳しかった先輩、優しく甘やかしてくれた方々に感謝!

上村真智子



昭和の最後の日、松任谷由実さんのコンサートの日だったんですね。コンサートは平成となった後日に延期され「時代の大きな流れを感じました。」と松任谷由実さんの言葉、そんな思い出に感謝!

石山由希子



就職先で事務員をしていたころ平成になりました。子どもを授かったことが一番の感謝ですが、ダメダメのひよっこを厳しく温かく育て見守ってくれた全ての人々に感謝の極み。

吉田 瞳



思春期～成人、学生、就職、結婚に産産と、あらゆる場面で貴重な人々との出会いをたくさんした。何よりも自分の子供たちに出会えた奇跡☆ありがとう

佐々木祥子



平成にこの世に生れ、ここまで育ててくれた両親に一番感謝。事件や災害も多かったですが、私自身わりとほのぼのの生活できている環境が本当にありがたいと思っています。

歌舞伎を詠む

新年・初芝居

小泉 芝雲



大学入学とともに歌舞伎に出会い以来55年。舞台鑑賞にとどまらず、演じ、語り、「歌舞伎の名せりふ」を讀んじ、ボランティアで慰問もされたという著者。四季折々の季語をベースに6回にわたり歌舞伎を詠みます。待ってました!

私が、十二年前に俳句を始める切っ掛けとなったのは、学生時代から観続けてきた歌舞伎に俳句との共通点を見つけ、俳句に親しみを抱いた為です。いずれも①季節感を重んじ、②型を大切に、③独特の表現法(俳句の「切れ字」、歌舞伎の「見得」)を持つていて、特に①に於いて俳句「季語」の中に歌舞伎関連季語が多く見られるのです。そこで一年に亘り、四季ごとに歌舞伎と季語の関連に触れ歌舞伎と俳句の縁を探ってみようと思います。

今回は先ず、新年の季語「初芝居」(関連季語:春芝居、初曾我、二の替)を取り上げます。初芝居とは、正月に興行される歌舞伎芝居の事で、各劇場とも「初春」とか「新春」のキャッチフレーズを掲げ、門松を飾り、ロビーには鏡餅、役者絵の大羽子板、大凧、更には餅花が飾られ、特に初日には獅子舞や、お酒が振舞われます。初芝居には観ると寿命が伸びる縁起物だとの言い伝えがあり、芝居ファンにとっては顔見世興行と共に見逃せないビックイベントなのです。

年々やたのしさまざる初芝居 水原秋櫻子
看板の大羽子板の歌右衛門 吉右衛門(秀山)
尚、京阪では「初芝居」を「二の替」と呼ぶのは、十一月の「顔見世」が芝居の正月と言われた頃、当り狂言は顔見世に引き次ぎ新年にも演じられたということによる様です。

炭の香のなみださそふや二の替 久保田万太郎
初芝居の出し物はお目出度い物が多く、正徳三(一七一五)年から曾我物が出し物に入るようになり、「初曾我」という季語も出来ました。なぜ曾我物がお目出度いかと言えば、曾我十郎・五郎兄弟が、無事に親の仇を果たせたという事による様です。代表的曾我物は『対面』、『矢の根』、『助六』等であり、五郎・十郎の衣装模様(五郎は蝶、十郎は千鳥)、五

郎の隈取を詠んだ次の句があります。

初曾我や灯にひるがえる蝶千鳥 吉田 冬葉

初曾我や五郎の隈はむきみ隈 戸板 康二

因みに今年の五劇場の初芝居の出し物を見てみると典型的な初芝居の狂言もあります。

歌舞伎座 襲名間もない高麗屋一門中心による『舌出三番叟』、『吉例壽曾我』、『勢獅子』及び『廓文章』(幸四郎と七之助による)、『大蔵譚』(白鸚)

と人間国宝吉右衛門の『絵本太功記』等。
新橋演舞場 人気役者海老蔵を座頭とし、祖父十一代目團十郎の生誕百年を偲び、子供二人と舞う『牡丹花(なとりぐさはなの)十一代』と『春興鏡獅子』等。

成田屋の睨み千両初芝居 小泉 芝雲

浅草公会堂 尾上松也以下、二十代の若手による『寿曾我対面』、『乗合船恵方万歳』等。

国立劇場 菊五郎・菊之助・孫と三代揃う復活狂言『姫路城音菊礎石(ひめじじょうおとにきくそのいしずえ)』を通して上演。(菊五郎による復活狂言上演は吉例)

大阪松竹座 人間国宝坂田藤十郎米寿祝いを兼ね、山城屋・成駒屋親子三代揃う舞踊『寿榮藤末廣(さかえことほぐふじのすえひろ)』と、お家芸玩辞楼十二曲より『土屋主税』、『心中天網島・河庄』。夜は愛之助が通し狂言『金門五三桐』で石川五右衛門を勤める。

本日はこれ切り

●プロフィール

1943年山口県下関生まれ。本名、小泉正行。慶應義塾大学在学中より本格的に歌舞伎に親しみ、2007年より歌舞伎をテーマに作句。歌舞伎研究会三田会会員。三田俳句丘の会会員。大河俳句会会員。深吉野俳句会同人会長。

2019.2-3. vol.102 (2019年2月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395 Facebookもチェック
喜怒哀楽書房 株式会社ミュージズ・コーポレーション
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

編集後記
前号より「編集室だより」が、今号より「歌舞伎を詠む」「ありがとう 俳句人生に乾杯!」が新たにスタートしました。「不易流行」。100号を経て、変わらない本質的なものと時々の新味をエッセンスに、古びることなく進化と深化を続けていきたいと思っています。今号の「リリック鍛錬会」の皆さまも浜田享子さんも、自らに負荷をかけ、持って生まれた能力に磨きをかけ、人生を味わい深いものとしていました。楽しい人生は、お気楽な日々の積み重ねでは決してないこと、苦しいこともあるけれど、だからこそ楽しい人生なのだ改めて感じました。人生楽じゃないのねえ。(木戸敦子)